

経験が経験であることの必要十分条件は何か— 経験の主体である自我は何の主体なのか—

福田 敦史

はじめに

「自我 (self) とは何か」という問いに対しては、おそらく、さまざまな文脈を背景にして多様な主張が現われることであろう。しかしそれでも、ひとまずは自我を「経験の主体」として特徴付けることには、比較的賛意を得られるのではないだろうか。しかし、もちろん、自我は経験の主体である、と答えてみただけでは、自我がいったい何であるのかそれほど明確になったわけではない。少なくとも、主体とはどのようなものであるか、についての説明が必要であるし、自我がその主体であるとされているところの、「経験」というものが何であるのか、についての説明が必要であろう。

本稿では「自我は経験の主体である」という主張を念頭におき、自我がその主体であるところの「経験とはそもそも何であるのか」という問題について検討する¹。より具体的には、ある事柄が経験であるための必要十分条件は何であるのか、という問をとりあげることにする²。

しかし、経験という基本的・根本的なものについて、辞書の項目のように一から定義的に説明する、ということはなかなか困難なことである。そこで本稿では、次のような順序で議論を進めていきたい。まず、経験とみ

1 本文において第三者的な視点から経験について論じているところもあるが、本稿では「経験」をまずもって「私の経験」として扱う。しかしもちろんのこと、他者は経験など持たず私しか経験を持たない、と考えているわけではない。経験についての、一人称的な取り扱いと三人称的な取り扱いの関係については、本来であれば丁寧な検討が必要な問題である。

2 経験というものは、哲学においても議論に必要不可欠なものとして登場するのだが、「経験とは何か」という問が正面切って取上げられることは思いのほか少ない。その数少ない最近の例であり、好著でもあるものとして植村玄輝・八重樫徹・吉川孝 (2017) がある。この本の第三章では経験の必要十分条件として「志向的であること」と「一人称的であること」とが取上げられて検討されている。この主張については他日あらためて検討したい。

なせるであろう諸例を挙げることから始める。その際、次の二つの条件を経験であることの仮の十分条件とみなしてリスト・アップすることにする。その二つの条件とは1) それが私自身に生じている、あるいは、それが私に帰属することと、2) そのとき私がそのことに気づいていること、である³。この二つの条件を指針にして経験の諸例を挙げた後、次に、この二つの条件が経験であることの必要条件であるか否かを検討する。そして、最後にあらためて、この二つの条件が十分条件でもあることを確認することで、この二つの条件が、経験が経験であることの必要十分条件であると主張したい。

ひとつ注意を付け加えておくと、以下の論述では、経験とみなせるものの中に、ある程度の区分を施し、それらを順に示しながら説明を進めていくことになるが、そこでの目的は経験に区分を施すことそのものにあるのではない。あくまで、経験にどのようなものがあるかを確認することが目的である。したがって、そこでの区分は、経験の種類を峻別する絶対的区分として提示しているわけでもなければ、私たちの経験を網羅的に取り扱うものとして提示しているわけでもない。

1. 経験の諸例

まず、例えば「中庭を歩いている人たちを図書館の窓から見ている」といった私の視覚経験、「強風によってあおられた電線がうなる音が聞こえる」といった私の聴覚経験、そして、ざらざら・つるつる、冷たい・熱いなどといった触覚に関わるもの、さらに、味わいや香りなどといった私の諸感覚知覚といったもの。哲学において、経験というものが論じられる場合、しばしばこうした知覚経験こそが主要なものとして取りあげられるが、確かに、問題なくこれらを経験として挙げることができよう。これら感覚知覚は、みな私に生じている感覚であり、加えて、私はそのこと（私が知覚していること）に気づいている。そうであれば、これらを経験とみなす

3 「気づいている」とは、経験しているそのことに自己意識的に気づいている、ということである。「気づき」についての重要な論点であるにもかかわらず、紙幅の都合があり本稿では扱えなかったが、少しだけ附言しておく、ここでの自己意識的な気づきは、反省的に気づいている、ということではなく、非措定的に気づいている、というものである。この論点については、例えば、Zahavi (1999), Zahavi (2005), Zahavi (2014)などを参照。

ことができる。

次に、外界の対象についての感覚知覚ではなく、自分の身体やその状態に関して私が直接的に持つ身体感覚、あるいは「固有感覚 (proprioception)」や「運動感覚 (kinesthesia)」といった表現で呼ばれることがある感覚はどうであろうか。こうした身体感覚は、日常、わざわざ「経験」という表現で呼ばれる場合は少ないかもしれない。例えば「いま椅子に座っている」ということを、ことさら経験として拾い上げるような場面は日常においては、さほど多いようには思われなない。けれども、「足を組んでいる」や「横になっている」あるいは「腕を曲げ伸ばしている」などといった自分の身体についての感覚は、私に生じている感覚であり、しかも、私はそのことに気づいている。そうであれば、これらを経験とみなすことができるであろう⁴。

いままで挙げたものは、いずれも何らかの感覚器官によって知覚され感じとられているものである。視覚経験であれば眼という感覚器官 (受容器) によって視覚対象が捉えられており、聴覚経験であれば耳という感覚器官によって聴覚対象が捉えられているものである。身体感覚・運動感覚などの場合であっても、固有感覚であれば、筋や腱のうちの繊維や関節などの固有感覚受容器 [筋紡錘 (muscle spindles), ゴルジ腱器官 (Golgi tendon organs), 関節受容器 (joint receptors)] によって自らの身体位置が捉えられているし、平衡感覚などは、内耳における前庭系 (vestibular system) などの働きによって捉えられている⁵。

それでは、特定の感覚器官によって何かが知覚されているとは単純には言いがたいような、「情動 (emotion)」や「感情 (sentiment; feeling)」などといったものはどうだろうか。このような情感としてここで念頭におかれているものは、例えば、私が抱く不安感や高揚感などといったものである。こうした情感の場合、どのようなことが原因になって不安になってい

4 「感覚剥奪 (sensory deprivation)」というものが可能であるならば、これは何も感覚していないという状態であるが、これも経験である。

5 もちろん、これらの感覚が単独の感覚器官のみで捉えられているわけではない。例えば、「カレーがおいしい」という経験は、味覚や嗅覚やその他のいりまじった感覚だろうし、平衡感覚であれば、前庭系だけでのみ捉えられているのではなく、固有感覚や皮膚感覚と、そして視覚などとの共働で捉えられている。知覚経験における「マルチモダリティ」についての論考としては、例えば村田 (2019)。

るのか、何についての不安を抱いているのか分からない、という場合もあるだろう⁶。また、いったいどういうわけで気分が高まっているのか自分自身でもよくは分からない、といった場合もあるであろう。しかし、たとえば、このような情感の場合であっても、私が実際に、不安な感じや高揚した感じを抱えていて、そのことに気づいているならば、それは私の経験とみなすことができる。

私が経験することは、以上のような感覚知覚的なものや情感に関わることばかりではない。例えば、日常では「考える」や「思う」あるいは「想い出す」「想像する」などといった言葉で表現され、しばしば「思考」と広く呼ばれるようなものも、実際に私がその思考を抱えている（つまり実際に考えている）ならば、経験として挙げられる。例えば「数学の問題の解法について考える」や「図書館がもう少し遅くまで開館していればいいのと思う」、あるいは「来週の授業の進め方について考える」や「一昨年の友人宅でのパーティーの様子を想い出す」「自分がその場に居合わせた場合のことを想像する」などといった思考は、いずれも、私が授業の進め方について考えるのであり、私がパーティーの様子を想い出すのであり、これらの具体的な思考はどれも私に帰属するものであり、経験である。

また「行為」も経験のうちを含めてよいだろう。私の行為は、私に生じている事柄であり、加えて、私はそのことに気づいている。「手紙を書く」、「お茶を飲む」、「ボールを蹴る」、「犬と散歩する」などなど、私がボールを蹴り、私が犬と散歩しているのであれば、これらは私がしている行為、すなわち、私に帰属する行為であり、私の経験である。

しかしながら、経験のうちに行為を含めることができるとしても、経験というものがすべて行為のように意図的ないし能動的なものでなければならない、というわけでは決してない。いわば受動的なものや非意図的なものであっても経験とみなすことができるものは多数ある。例えば、「蜂に刺される」や「お腹をこわす」、「友人にぶたれる」や「まぶたがびくびく

6 とはいえ、情感にその対象が存在するか否かはそれほど簡単に答えが出る問題ではない。確かに、いかなる情感にもその対象はない、というわけではおそらくないであろう。しかし、例えばハイデガーが『存在と時間』において、「根本的情状性(Grundbefindlichkeit)」としての「不安(Angst)」に関して述べているように、明確な対象がない情感というものがあることは確かなように思われる。この点に関しては、ハイデガーが「世界全体」を不安の志向的对象とみなしているとも解釈できるが、しかし、それは志向性というものを拡張しすぎであるように思われる。

と煙撃する」などの場合、これらは一般的に、私が意図的・能動的にしていることではない（もちろん、ある文脈においては能動的に行われる場合もあろうけれども）。これらはいわば受動的と見なされるようなものではあるが、すべて私に生じていることであり、そのことに私が気づいている。そうであるならば、これらは私の経験である。

以上が二つの条件を十分条件とした場合の暫定的な経験のリストである。

2-1. 経験であることの必要条件の検討

ここからは、経験のリストを念頭に置きながら、二つの条件が必要条件であるかどうかを検討することにしよう。

さきほど挙げた経験の諸例はすべて、私自身に生じている事柄であり、加えて、私がそのことに気づいている事柄である。ひとつめの「私自身に生じている」という論点から確認しよう。例として挙げた知覚・感覚経験、情感、思考や行為、状態などのどれであっても、また、それらが能動的であっても、あるいは受動的なものであっても、これらすべてが私自身に生じていることである。私の経験は私自身に生じているものでなければならない。

これに対して、例えば「タローが中庭を歩く」や「クスノキが強い風によってあおられる」といったことの場合は、これらは私の経験ではない。というのも、「中庭を歩く」ということも、「強い風にあおられる」ということも、私に生じていることではないからである。前者は（おそらくは）タローの「歩く」という経験であろうし、後者は自然現象や事象などと呼ばれるものであろう。これらは私に生じていることではないのであり、私の経験ではない。

もちろん「クスノキが強い風によってあおられる」ということを、例えば、私がいま想像しているのだとするならば、ここには確かに私の経験がある。しかし、この場合の私の経験というものは、「クスノキが強い風によってあおられることを想像する」という経験なのであって、「クスノキが強い風によってあおられる」という経験なのではない。経験であれば、必ず私に生じているのであり、私に生じているのでなければ、それは私の経験ではない。いまの例の場合、「クスノキが強い風によってあおられることを想像する」ということは私に生じていることであり私の経験であるが、「クスノキが強い風によってあおられる」ということは私に生じていることで

はなく、したがって私の経験ではない。

いまみたように、経験であるためには、それが私に生じているのでなければならぬ。しかしながら、私自身に生じていることであるならば、これらをすべて経験と見なせる、というわけではない。それが私に生じているものであっても、それを経験であるとみなせるためには、そのことに私は気づいている必要がある。もし気づいていないとするならば、たとえそれが私に生じているものであっても経験とはみなせない、ということである。

このことを確認するために、もうひとつの「そのとき私がそのことに気づいている」という条件を確認することにしよう。

まず例えば、私の体内の臓器である胃や腸は、私が食べたものをいま消化したり、その栄養や水分を吸収したりしているものと思われる。しかし、例えば「夕飯に食べたカレーライスを自分の胃が消化している」ことを経験しているとは見なさないであろう。胃や腸における消化や吸収は確かにいま私に生じていることである。またこれらは私に因果的な影響を与えてさえもいる。しかしながら、このことを私が経験しているとはみなさない。なぜならば、いま私はこのことに気づくことができず、気づいていないからである。

もちろん、胃カメラの映像などを用いれば、私は自分の胃が食物を消化していることを知ることはできるかもしれない。しかし、これは「胃が食物を消化しているのを見る」経験であって、「胃が食物を消化している」経験ではないのである⁷。

また例えば「色の恒常性 (colour constancy)」と呼ばれる現象のようなものはどうであろうか。色の恒常性とは、「知覚された色、あるいは、見た目の表面色が、照明の強度と分光組成における違いにもかかわらず、一定のままであること⁸」などと説明される事柄である。例えば、私たちは、赤いトマトの有する赤さを、スーパーの野菜コーナーの蛍光灯の明かりのもとでも、買って持ち帰る際の屋外の太陽光の下でも、そして家の冷蔵庫庫

7 しかし、例えば満腹だったお腹が時間の経過と共に楽になり「胃が食物を消化した・胃がこなれた」ということは経験できると思われる。これは変化の結果に基づいて、状態の変化を認識するという経験であろう。指摘しておきたいことは、結果に基づいて変化した状態を経験できるこのような場合であっても、その変化の過程そのものである「胃の消化」自体はやはり経験できない、ということである。

8 Foster (2011) , p.674.

の野菜室の暗めの明かりのなかでも、同じトマトの「同じ赤さ」として知覚し続ける。この場合、照明光の違いにより、トマトから反射されている光の物理的性質は異なっているのにも関わらず、脳を含めた私たちの視覚システムがいわば補正をかけて「同じ赤さ」として見ているのである⁹。しかし、私たちは通常、視覚システムのこの「補正」に気づくことはない。

色の恒常性と呼ばれる現象の効果・結果は、私の視知覚において経験していることだが、色の恒常性そのものの経験は、通常、私たちはもつことはない。そして、このような、気づかないレベルで働いている脳神経の機能というものには色の恒常性の他にも多数挙げることが可能であろう。

このように考えるならば、臓器の働きの多くや脳神経の活動そのものは経験とはみなせない、ということになる¹⁰。私が飼い犬の写真を見ている時、眼の網膜において情報が処理されることから始まって、変換されたその電気信号が視神経を通り、脳で処理されるまで、さまざまな部位でさまざまな活動がなされているはずであるが、私はそのことに気づくことができない。飼い犬の写真を見る、という経験を私はすることができるが、飼い犬の写真を見る際の脳神経の活動そのものを経験することはできないのである。

私自身に生じていることではあっても私が気づいていない、というケースは、筋肉や臓器の不随意運動や生理学的活動、あるいは脳神経の活動のような、言うなれば、そのことに原理的に気づくことができない、というようなものに限られるわけではもちろんない。「気づくことが原理的に排除されているわけではないが、そのとき気づいていない」ために経験とはみなせない、というケースも多々ある。

例えば、電線に止まっているスズメが、たまたまその下を歩いている私の右肩にフンを落としたものとしよう。しかし、私はそのことにまったく気づかずそのまま歩き続けているものとする。ここで「右肩にフンをされた」ことは、明らかに私に生じていることであり、世界内の事実である。

9 色の恒常性がどのようなメカニズムで生じているかについては、ラントのレティネックス理論 (retinex theory) など諸説あるが決定的なものはない (栗木・内川 (1995) 参照)。なお、色の恒常性は人間に特有のものではなく、その他の生物、例えば、サル、魚、蜂なども確認されている。

10 全てとは言えないと思われる。例えば、自分の心臓が拍動していることに気づくことは通常それほどはないことであろう。しかし、運動後や興奮したときなどに、心臓の拍動に意識が向き、心臓という臓器の働きに気づく、ということは自然なことである。

このとき、もし、私が上からフンが落ちてくるところを見ており、自分の右肩に運悪くそのままフンが命中してしまったことに気づいているのであるならば、このことは経験であるとみなせよう。つまり、私は右肩にフンをされた経験をしているのである。しかしながら、ここでの想定では、私はこのことに気づいていないのである。そうであれば、この「右肩にフンをされた」ことは、たとえ私に生じていることであっても、私の経験とはみなせないのである¹¹。

2-2. そのときに気づいているのでなければならない

経験が経験であることにおいて、それが私自身に生じている、ということと、私がそのことに気づいていること、という二つが必要な条件である、ということを見てきた。ここまでの議論に対して「私がそれに気づいていないけれども、にもかかわらず私の経験というものがある」という反論があるかもしれない。すなわち、経験であることにおいて、私がそれに気づいている、という条件は必要ではない、という反論である。

このような反論には、例えば、「盲視 (blindsight)」の事例をとりあげて論じるものがあるかもしれない。盲視とは、病気や事故、手術などで片側の第一次視覚野を損傷し、損傷した側とは反対側の視覚野を失った半盲(半側視野欠損)のひとが、本人自身には見えているという意識は伴っていないのだが、欠損視野領域にある光点や物体の位置や運動、形などに対して反応、識別することができるというものである¹²。盲視についての現在有力な説明によれば、私たちの視覚情報処理には大きく二つの経路が存在しており、盲視患者の場合、このうち「視覚の意識的な気づき」も関わる腹側経路が損傷はしたものの、もう一つの経路である上丘経路を通して視覚情報が処理されるため、本人に見えているという気づき (awareness) は生じないが対象への反応が可能である、と解釈される。ここで、盲視患者のひとたちは、自分に生じている、見えているという気づきのない盲視

11 したがって、経験であるか否かがタイプとしてあらかじめ決まっているわけでは必ずしもないということである。「右肩にフンをされた」という事柄であれば、この事柄がタイプとして経験であるか否かが決まっているのではなく、あくまで個別の事例において、気づいていれば経験であるし、気づいていなければ経験ではない、ということである。

12 盲視についてはWeiskrantz (2009) など。

という「経験」をしたとみなせるのではないか。盲視患者が「自分は盲視を経験した」と語るのは自然なことではないのか。

この「盲視の経験」という事例を検討することは、「そのことに気づいている必要がある」という条件をより明確化することに繋がる。それは「そのときに気づいている」という論点である。

一旦、盲視の事例を離れて、次のような事例について考えてみよう¹³。5年前に私が旅行である地域に出かけた時に、全身が鮮やかな赤い色をした鳥が樹にとまっているのを見たものとしよう。この時、もちろん私は「赤い鳥を見る」経験をしているとみなせるであろう。さらに、この時には私は知らなかったのだが、私が見た赤い鳥が「ショウジョウコウカンチョウ(cardinal)」という鳥であるということ、後日、自分で鳥類図鑑を見るなり、あるいは鳥類に詳しい人から教えてもらうなどするなりして知ったものとしよう。この場合、私は「ショウジョウコウカンチョウを見る」経験をしていた、と言えるであろうか。

問題は、5年前の過去のことをいま振り返って「ショウジョウコウカンチョウを見る経験をした」と言えるか、ということではなく、5年前のそのときに「ショウジョウコウカンチョウを見る」経験をしているかどうか、である。つまり、5年前のそのときに私は「ショウジョウコウカンチョウを見ている」と気づいているか否か、である。答えは、気づいていない、であろう。というのも、私はそのときには自分が見ている鳥がショウジョウコウカンチョウであることを知らず、そのため「ショウジョウコウカンチョウを見ている」ことに私が気づくことはできないからである¹⁴。した

13 事例はMalcolm (1963) から借りている。なお、そこでマルコムは過去の自身の体験についての直接的に思い出している体験記憶と、こうした体験記憶と過去の自身の事柄に関する知識との連言としての記憶との違いについて述べている。本稿の議論とマルコムの議論とを繋げるならば、「経験」というものは、マルコムがいうところの「純粋記憶 (pure memory)」として後に思い出されるような、もともとの経験のこと、ということになる。

14 しかし、実は問題はさほど単純ではない。例えば私が昨日友人宅でとても辛いトウガラシを食べ、今日になってそのトウガラシが、いま世界でもっとも辛いトウガラシであることを知ったものとしよう。この場合は「私は世界で最も辛いトウガラシを食べる」経験をした、と(より自然に)言えそうである。これはおそらく「世界で最も辛いトウガラシの辛さ」を体験しているからだと思われる。問題は、何がどれほどあれば、それを経験している(場合によっては、知っている)とみなせるか、という根本的なものに繋がるものであり、本稿で扱える範囲を超えるものである。

がって、私は「ショウジョウコウカンチョウを見る」経験をしていた、と言えないということである。

盲視の事例に戻ってみよう。盲視患者のひとは、実験の後に自身の結果を知らされたり、時には実験の際の映像を見せてもらうことで、自分は「対象が見えていないのに対象を識別する盲視というものを経験した」と語ることは十分に考えられるし自然なことである。しかし、盲視の実験のそのときには、自分が対象を認識している、ということに盲視患者のひとは気づいてはいない。自分では、対象を認識しているとはとても思えないのであるから。そうであるならば、盲視患者のひとにとって、盲視は経験ではないのである¹⁵。

盲視患者のなかには、実験の際に何も見えている感じがしない、というひともいれば、対象は見えてはいないが「なんらかの感じ」をもつ人もいるようである。この後者の場合であっても、「なんらかの感じをもつ」経験をしている、とはいえるが、やはり対象を見ている経験をしているとはいえないのである。

以上、経験が経験であるためには、1)それが私に生じていることと、2)そのとき私がそのことに気づいていること、という二つの条件が必要条件である、と言えそうである。

3. 経験であることの十分条件の検討

それでは、本節ではあらためて、1)それが私自身に生じているということと、2)そのとき私がそのことに気づいていること、という二つの条件が、経験が経験であるために十分な条件と考えられるかを検討しよう。果たしてこれらの二つの条件が満たされていれば、経験であることにとって十分なのであろうか。条件が満たされているのにもかかわらず、私の経験ではない、という事例を考えることはできないのであろうか。

これらの二つの条件が経験の十分条件であることを否定するのは確かに

15 それでは、盲視はいかなる経験でもないのか、という疑問が抱かれるかもしれない。この論点も本稿では扱えないが、「後で気づいた経験」は（一人称現在の）自我としての私の経験ではなく、客観的な人格としての私の経験である、という取り扱いが適切であると論じる予定である。

16 経験の十分条件としての一人称性について、同様の論点が植村玄輝・八重樫徹・吉川孝（2017）、p.84で触れられている。

なかなか難しいことだが¹⁶、ここで、「エイリアンハンド徴候 (alien hand sign)」や「エイリアンハンド症候群 (alien hand syndrome)」と呼ばれる事例などを反例としてあげることにはできないだろうか¹⁷。エイリアンハンド症候群とは、自分のものである腕が、自分の意志とは無関係に、そして時に、自らの意志に反して動いてしまう事例を言う。有名な事例としては、「正常な側の手」がシャツのボタンを留めているそばから、本人はまったく意図していないのに「異常な側の手」がそのボタンを外してしまうというものが紹介されている¹⁸。このような事例では、本人はこうした現象が自分に生じており、なおかつそのことに気づいてもいる（そのためしばしば患者本人も当惑し困惑している）。しかしながら、患者本人は、このエイリアンハンドの手の動きを自分自身の手の動きであるとは感じていないのだから、患者本人の行為や経験とはみなすことはできないのではないか。

けれども、これは適切な反例とはならないと考えられる。というのも、確かに、エイリアンハンド症候群の手の動きは、患者本人の意図している行為でない、ということは明らかなことである。すなわち、この症例の手の動きは意図的行為ではない。しかしながら、経験が経験であることにおいて、それが意図的ないし能動的であるか否かは関係ないものであることに注意しなければならない。エイリアンハンド症候群の手の動きは、自分の意図しない手の動きではあるが、この「自分の意図しない手の動き」が自分に生じている、という経験なのである。ギャラガーが「思考吹入」について指摘していることだが、エイリアンハンド症候群も「所有者性感覚 (sense of ownership)」が失われたのではなく、「行為者性感覚 (sense of agency)」が変容をきたしている事例としてみなすべきであろう¹⁹。したがって、「手の動きの経験であるか否か」という観点からみるならば、エイリアンハンド症候群の手の動きが経験であるのは、健常者が自分の手を他人に無理矢理動かされる場合であっても、その手の動きが経験であるのと同様である。

17 類似した反例として考えられるものには「思考吹入 (thought insertion)」がある。

18 Bogen (1993).

19 Gallagher (2000), p.16.

おわりに

経験とは私たちにとって日常あたりまえのごく基本的で根本的なものの一種であると言えよう。そのためにかえって、その必要十分条件を問題にすることには、根本的な概念を取り扱う際に特有の困難がある。本稿では、1) それが私自身に生じている、あるいは、それが私に帰属することと、2) そのとき私がそのことに気づいていること、の二つの条件をその候補として検討した。本論ではまず、この二つの条件をひとまず経験であることの十分条件とみなして経験の諸例を挙げ、次に、この二つの条件が経験であることの必要条件であるかを検討し、そして、最後に、この二つの条件が経験であることの十分条件であるかをあらためて検討する、という流れで議論を行った。いくつかの重要な論点を取り扱うことができなかったが、この二つの条件が経験であることの必要にして十分な条件であることの提示は、最終的には本稿の議論全体で試みられていることである。

文献表

- Bogen, J. E. (1993), "The Callosal Syndrome" in K. M. Heilman and E. V. Valenstein[eds.], *Clinical Neuropsychology* (3rd ed., pp.337-407), Oxford University Press.
- Foster, D. (2011), "Color Constancy" in *Vision Research*, vol.51, pp.674-700.
- Gallagher, S. (2000), "Philosophical Conceptions of the Self: Implications for Cognitive Science" in *Trends in Cognitive Sciences* 4/1, pp.14-21.
- Land, E.H., (1977), "The Retinex Theory of Color Vision" in *Scientific American*, 237 (6), pp.108-128.
- Malcolm, N. (1963), *Knowledge and Certainty*, Cornell University Press.
- Weiskrantz, L. (2009), *Blindsight: A Case Study Spanning 35 Years and New Developments*, Oxford University Press.
- Zahavi, D. (1999), *Self-Awareness and Alterity: A Phenomenological Investigation*, Northwestern University Press.
- (2005), *Subjectivity and Selfhood: Investigating the First-Person Perspective*, The MIT Press.
- (2014), *Self and Other: Exploring Subjectivity, Empathy, and Shame*,

Oxford University Press.

植村玄輝・八重樫徹・吉川孝 [編著]・富山豊・森功次 (2017) 『現代現象学：
経験から始める哲学入門』新曜社.

栗木一郎・内川 恵二 (1995) 「瞬時色恒常性におよぼす周辺刺激と色の見えの判断基準の効果」『照明学会誌』79巻2号pp.39-48所収.

村田純一 (2019) 『味わいの現象学』ふねうま舎.

横澤一彦 (2010) 『視覚科学』勁草書房.